

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷素之
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	河野荘子

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

「自分が何を感じているのかわからない・言い表せない」「人に自分の気持ちをうまく伝えられない」といった、自他の感情の認識や伝達の問題は、アレキシサイミアと呼ばれる心理的傾向が関わっていると考えられる。アレキシサイミアとは、自身や他者の感情識別や感情言語化の困難を表す概念であり、近年パーソナリティや感情の心理学において精力的に研究が進められているテーマのひとつである。

また青年期は、生涯発達のなかでも、自我に悩み、他者との関係やコミュニケーションに不安や悩みを感じる時期である。感情の認知やコントロールに関わる心理学的概念はさまざまあるが、なかでも自分自身および相手の感情を知覚・識別し、言語化することの困難を意味するアレキシサイミアは、近年心身の健康や逸脱行動などの問題との関連が指摘され、青年期の心理社会的適応に重要な意味をもつものと考えられる。本研究は、これまで研究の少なかった青年期のアレキシサイミア傾向の発達の特徴や心身の適応との関連について明らかにし、加えて一般青年だけではなく非行少年も対象とし、臨床的な検討および教育介入の可能性を考察している。

本論文は6つの章、4つの研究から構成される。第1章では、不登校や非行などの適応の諸問題において、感情認知や感情の伝達・表現の困難さの重要性について触れ、アレキシサイミア概念を取り上げる意味が論じられた。そしてアレキシサイミア概念の整理、測定法についてのレビューし、特に青年期に着目する理由について議論した。

第2章（研究1）では、青年期版アレキシサイミア尺度の作成を行った。これまでもっとも多用されるアレキシサイミア尺度である TAS-20 (Bagby, Parker, & Taylor, 1994) を基に作成された AQC (Alexithymia Questionnaire for Children : Rieffe et al., 2006) を邦訳し、TAS-20 と同様に 5 件法で回答を求める青年期用アレキシサイミア尺度を作成した。中学生 1241 名（男子 647 名, 女子 594 名）を対象に検討した結果、従来の研究と同様「感情識別困難 (difficulty identifying feelings : DIF)」、「感情伝達困難 (difficulty describing feelings : DDF)」、「外的志向の思考 (externally-oriented thinking : EOT)」の 3 因子構造が確認された。

第3章（研究2）では、中学生、高校生、大学生に調査を実施し、10代のアレキシサイミア傾向の特徴を明らかにした。本研究で開発された青年期版アレキシサイミア尺度を中学、高校、大学生 2 775 名（男子 1 529 名、女子 1 505 名）その特徴を検討した結果、一貫して男性より女性でアレキシサイミア傾向が高く、下位尺度では、感情識別困難と感情伝達困難では女性が有意に高く、外的志向の思考では男性が有意に

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

高かった。また、諸外国の 10 代を対象とした調査結果と比較し、日本人の 10 代においては、感情識別困難と感情伝達困難は高校生以降で高まる傾向が示された。

第 4 章（研究 3）では、アレキシサイミア傾向が身体的な健康に与える影響について検討を行った。結果として、中学生男子では、アレキシサイミア傾向のうち「感情識別困難」「感情伝達困難」が身体不調感に影響が見られたのに対し、女子では「感情識別困難」の影響と、「感情識別困難」「感情伝達困難」の交互作用が有意であり、発達的にも性差がみられることが示された。

第 5 章（研究 4）では、一般男子と非行少年を対象に、アレキシサイミア傾向の特徴と、怒りのコントロールへの影響について、パス解析によって検討した。一般の高校生および大学生 687 名、そして少年院入所者 266 名を対象に調査を行った結果、一般の高校大学生に比べ、非行少年ではアレキシサイミア傾向が総じて高いことや、感情の知覚およびコントロールに未熟さがある可能性が指摘された。またアレキシサイミアと怒り表出、コントロールの関連に関するパス解析の結果、青年期後期において性差が明確になることが明らかとなった。最後に第 6 章では、全体的な考察を行い、本論文の意義および今後の課題について論じられた。

口述試験では、以上のような内容の本論文について、3 名の審査者から以下のような指摘・疑問が出された。

1. 本論文で扱う“アレキシサイミア”について、定義や先行研究はあげられているが、そもそもどのような概念だといえるのか。状態か特性か、あるいは能力か性格・態度か。アレキシサイミアの概念が心身医学等による内容や定義に基づいている印象で、心理学的な位置づけが不十分ではないのか。
2. アレキシサイミアの測定について、発達過程が捉えられているといえるのか。この傾向が発達とともに低下する、ということが望ましいのか。青年期後期になるにつれ、繊細な内省が可能になることで得点が上昇する可能性もあるのではないか。

## 論文審査の結果の要旨

3. 本論文で得られた知見を、臨床実践の場でどう生かしていけばよいか。また、非行少年では、愛着障害や発達障害などが含まれていることが考えられるが、アレキシサイミアは症状のような表れではないのか。問題の原因となるものを踏まえて、適切な理解や介入をすることが重要ではないのか。
4. 下位尺度のうち、「外面性志向の思考」について、いずれのデータでも信頼性が低く、尺度としての問題があるのではないか。また、他の下位尺度との関連がマイナスになるなどから、この下位尺度がアレキシサイミアの1側面を適切に測っているといえるか、少なくとも（原尺度があるとはいえ）内容を再検討する必要性もあるのではないか。
5. アレキシサイミアをもつ青年、あるいは非行少年を、どのような人格像、臨床像として理解すべきだと考えるか。心身症において好発する傾向という以上に、パーソナリティのどういう側面をアレキシサイミアは示していると考えられるか。

これらの指摘に対して、論文申請者はその意味を十分理解し、その上で、研究の内容を十分に踏まえ適切に回答した。

上記のような課題も考えられるものの、本論文の内容は、青年期におけるアレキシサイミアの特徴とその影響を明らかにする重要な研究であると考えられる。1. わが国では適切な測定尺度がみられない青年期版アレキシサイミア尺度を新たに開発し、わが国の青年期における発達的特徴を欧米の先行研究と比較対照し明らかにしていること、2. 中学生、高校生、大学生で、2800名近くもの十分な人数のデータに基づき、さらに少年院入所者においても266名という多数の対象者を基に、妥当なモデル、手続きで実証的な検討を行っていること、3. 一般青年と非行少年を対象に、アレキシサイミアの3つの下位尺度が、怒りのコントロールや表出、抑制にどのような影響を及ぼすかという独自性のある視点を提案しているなどの点で高く評価できる。

これらのことから、審査者は全員一致して「可」と判断した。